

# みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 4 NO. 2

昭和52年8月10日発行  
編集・発行人 市原 正夫

〒280

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311(代表)



—実技講座「千葉港を描く会」参加者より— 大網白里町 富塚勝男

## 観潮台

### 展示の立体化

美術館とくに公共美術館として、研究と展示をどう一体化するかは、本館開設以来の課題になっている。

こうして、常設展や特別展に並行して、美術普及室や参考資料室での、作品以外の歴史のあるいは社会的な、背景的资料を収集展示し、それぞれの展覧会の立体化をはかってきた。

当然のように、館内だけの研究成果では不十分なので、フィールド・ワークが要求されてくるが、結果としては、美術館の栄養になってふとることになり、展示への反映が期待でき、とかく、平板的になりがちな「作品の陳列場」から脱却できる。

すでに「浅井忠とその師弟展」や「香取秀真とその周辺」とか、「海と湖沼展」などの特別展で試行し、幸いにも、美術館に対する従来の固定観念だった、「作品の陳列場」の意識だけは一掃できそうだと、ささやかな自負を感じた。

とにかく、公共美術館としての路線は無限であり、利用者サイドの発想は重要である。

(高橋在久)

四、がとでの展覧会

公立美術館における展覧会には、当該館の企画のもの、貸会場として団体等の展覧会を受入れるところがある。前者は、美術館が行う展覧会であり、後者は、美術館で行う展覧会である。

このことは、当初の館の設置の趣旨にもよるところであるが、わが国の公立美術館は、がのみのところと、がとで両者を行うところ、主として、でのみと分れている。

博物館法の事業(第三条)から考えれば、が展のみでよい。貸会場は美術館として、不要なり、という議論も生れるところであるが、ここに美術博物館の特殊性もあって、で展の存在も見逃すことができない。

その理由として、地方公共団体としても、美術団体等に対して、公共の発表の場を提供すること、それ自身が、美術の普及振興にあたることで、それは、社会体育施設として、体育館・プール等を地方自治体が設置しているのと、全く同じことである。

そこで、がとでの館が別箇の施設として存在することも

考えられるが、私はむしろ現状では、同居の形態が望ましいと思つてゐるのは、

一つには、住民の利用者サイドからみれば、が展もで展も作品鑑賞の立場からは、何等変ることはないわけで、むしろ来館者が相互乗入れをしていける効果こそ大きいのでなからうか。

これからの美術館は、多くの住民に開かれた、心の憩いと楽しみ場所であればこそ、多彩な催しが必要とされ、従

## 私の公立美術館論(II)

館長 市原 正夫

来のような気どつたが展のみの単線展示に比べて、で展は自分たちの作品も展示できるということ、(本館は子ども県展にも使用)美術館を身近な施設として、親近感をもつことになるであらう。

今一つは、各団体に会場を提供することにより、それらの団体との連絡提携が密になり、いろいろな意味で、美術館に対する協力態勢が強くなることは必至である。それにある条件のもとで会

場を貸与するので、その団体の展の開催や展示方法にまで、ときには指導助言が出来て、団体の育成援助にまで及ぶことが出来るし、また逆にこれらの団体からが展に対する卒直な忠告もいたゞき、お互に切磋琢磨の機会ともなる。

問題は、がとでの量的なフランスである。での増加に伴い、がが圧迫され、その主体性を失うようになつたときには、施設の分離論が出てくるであらう。

### 五、「友の会」の役割

今日、大方の博物館等では、「友の会」を組織し、組織的継続的な利用の促進を講じているところである。

美術館友の会の存在価値と意義はどこにあるのか、その実態は、と考えることは美術館経営論としても重要な一面であると思う。

友の会は、会員自身からみれば、美術愛好者なり研究者の集いであつて、当該美術館

の行う事業に積極的に参加するために、その情報・連絡を密にすることから発足した組織と思うが、さらに意欲的に友の会が自主的に事業を計画し、館の協力・援助のもとで一体的に活動している面もみられる。

この友の会を館経営の立場から私なりに考えようと、前号でも述べたように、不特定多数という、つかみどころのない利用者の中で、お得意様として、常に連絡のとれるのが、

友の会の会員であつて、展覧会等の事業の推進役でもある。今一面の性格は、館事業に對するモニターと第一線の広報担当という重要な役割をもたせていたゞけるのでないか。

一つの事業に対する反応・評価や新しい事業等の構想について、利用者の声を聞くことは、極めて大切なことと思うが、そのはねかえりの期待できる利用者に友の会々員が考えられる。館の企画や運営が住民から遊離しないため

にも、美術館協議会のボランティア版にならないだろうか。次に、第一線の広報担当のことであるが、美術に関心をお持ちの千人の会員の方が、家族や知人に館の事業について、口コミしていただく影響力は計り知れないものがある。特に、展覧会を見ての感想などを語っていただくことは、他の広報媒体に見られない、説得力をもつた強力な広報手段である。

昨年、友の会の活動でも活発な運営をしている、栃木県立美術館を訪れた折、大島副館長が、友の会の業務は館の主要な本務であつて、団体の仕事の援助と思つてはいけな

いと強調されていた。本館でも担当職員が精力的に事務にあつてるところであるが、運営上の問題は、会員が会費を納めて、どれだけのメリットがあるか、また見返りがあるかということ、そのためにはどうしたらよいかと、積極的に事業を検討し、会員の獲得にも苦慮し努力しているところ、会員と館側のメリットが一致するようにすることが、私の今の願ひである。



# 本館初の巡回展

＝千葉県移動美術館＝

木更津市と館山市で

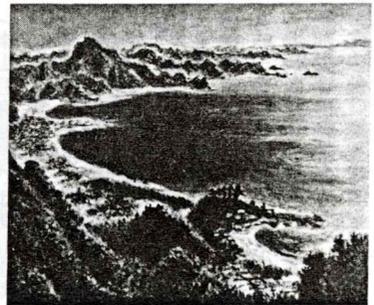
本館は、昭和四十九年十月に開館して以来、満三年になろうとしています。その間、五回の特別展をはじめとして十一回の企画展、および常設展等を行い、約三十万人の入場者を見ることができました。

しかし、本県は広く、しかも本館の所在地は県の中央ではなく、交通の不便さも手伝って県民のすべての方々に鑑賞していただけないことをまぬがれません。

そこで、本年度から県立上総博物館、県立安房博物館の協力を得て巡回展を行うこと

## 椿貞雄

「鋸山からみた房総半島」



になりました。

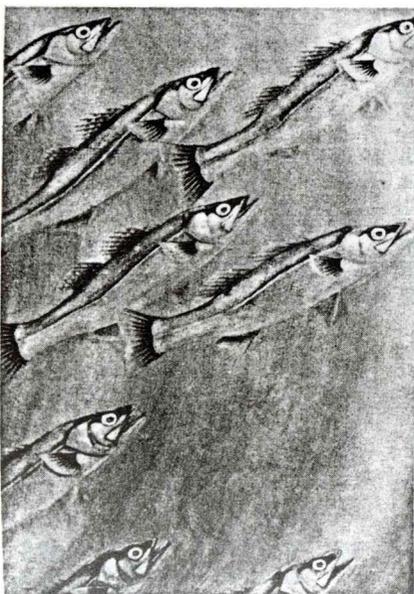
本県は首都東京に隣接し、純朴な気風と、温暖で恵まれた風土変化に富んだ景観から文人墨客の訪れることが多く明治以降でも著名な美術家が写生地を求めてこの地にやってきました。

そのような風土に住む人々に鑑賞していただくために、今回は本館が所蔵している作品の中から、主として本県にゆかりのある作品、たとえば本県を描いたもの、また海をモチーフにしたものなどを中心に、洋画・日本画・書・工芸・彫塑の五部門から三十三点を選び展覧いたします。

主な出品作品としては、浅井忠のデッサン（房州白浜、

浪太村、乙浜村）、都鳥英喜「海浜風景」、石橋武治「水辺初夏」、椿貞雄「鋸山からみた房総半島」、林俊衛「岩和田海岸」、大久保作次郎「丘上の鐘楼」、三田康「冬の犬吠岬」、無縁寺心澄「銚子大新楼にて」、石井林響「浦島太郎図」、富取風堂「群魚」津田信夫「鴨」などがあります。

その他、特別出品として昨年度特別展として取り上げ顕彰した明治洋画界の巨匠で、しかも本県出身者でもある浅井忠の佳品「農婦」に加え、浅井自身についての理解を深めていただくため浅井の関連資料も公開いたします。これらの作品を巡回展とし



富取風堂「群魚」

て公開する企画を実現することができた背景には、本県の博物館設置構想に基づき県内各地に県立博物館が建設されていることがあります。

一般的にみて巡回展は、企画されながらも会場の問題等で断念されるケースが多いようですが、その点本県は各地に博物館をもっているという条件に恵まれています。

この機会に本館で所蔵の作品を一人でも多くの方々に御覧いただきたいと思ひます。

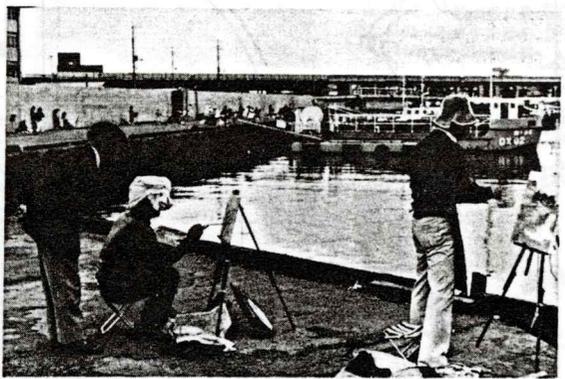
◎開催会場及び期間◎

▼11月3日～13日 県立上総博物館にて

▼12月4日～18日 県立安房博物館にて

# すすむ普及事業

—「みる・かたる・つくる」の充実—



5月22日「千葉港を描く会」

千葉県立美術館の基本的性格は、三つあります。  
(一)千葉県民の生活を豊にする、審美の心を培い、主体的で調和を秘めた、人格の完成をめざすための美術館でありたい。

(二)千葉県民主体の、地域と世界、歴史と現代に立脚した「観る、語る、創る」行動的な機能を備えた美術館でありたい。

(三)千葉県民のため現代美術の振興普及と歴史的な美術資料の整備、研究、公開の拠点としての美術館でありたい。

この三つの性格の具体化のため、開館当初から展覧会や実技講座を開催し、また特別展での講演会も行ってきました。

開館四年目の本年度は、特に、「みる・かたる・つくる」の「かたる」活動が従来やや遅れ気味でありましたので、パランスのとれた普及事業を現状の施設・設備等を使い、とり組んでいます。

四月十日に第六展示室(約三三〇平米)を美術普及室に改造し、美の広場の拠点として、図書コーナー、展示コー

ナー、集会コーナー、休憩コーナーの四つの利用目的で、美術普及棟が建設されるまでの間、設置しました。

「かたる」活動の充実を期し、五月から隔月開催の「美術を語る会」が新事業として発足しました。年六回予定のうち、すでに二回が行われ、第一回は「浅井忠を語る」(五月十四日)、第二回は「特別展海と湖沼展をみて」と題し、美の話題を参加者と共に語り合う自由な討論の場を求めて動き出しました。

特別展に関連する講演会として七月十六日に「海と湖沼展」で、日本画家渡辺学氏「なぜ漁民を描くか」を開催し好評でした。来年三月の特別展「東山魁夷展」では東山魁夷氏による講演会を予定しております。また第一回夏季大学を八月五日、六日に開講しました。「近代美術の流れと見方」をテーマに今回は、絵画と彫塑を中心に学習しました。講師陣には村木明・佐々木直比古・弦田平八郎・桑原住雄の各氏を招いて約百二十名の参加者を得ました。

二十三日の「人物画の基礎から着彩まで」の二回をすでに行った。実技講座への希望者は大変多いが、現状の施設ではそれらの要望を満たすことが出来ず、映画、スライド等の視聴覚教育を充実させ、美術館本来の目的を実現させるためには、美術普及棟の早期建設が望まれています。

なお、美術普及室は、9月5日から12月19日までの間、各種の展覧会場として使用するため、規模を縮小させていただきます。

## これからの普及事業

- 美術を語る会
  - 9月10日「現代工芸に思う」
  - 11月12日「世界の美術館」
  - 1月14日「菅谷元三郎、円城寺昇を語る」
- 3月11日「美術館を楽しく利用するために」
- 実技講座
  - 2月18日 木版画
- 講演会
  - 3月18日 「千葉に在りて三十年」(仮題) 東山魁夷氏
- 美術鑑賞バスの旅
  - 10月29・30日 水戸・笠間方面 (友の会主催)

※詳細は学芸課まで

## はげましの感想文

去る4月21日に本館を見学いただいた佐原市立香取小学校4年1組の皆さんより心あたたまる感想文がよせられました。その一つを紹介します。

ためになった美術館

四年一組 高岡美恵子

美術館にはいつてから美術館の人にあんないしてもらいました。

大きな絵がありました。大きな絵は明るい色をたくさんつけていました。大きな絵は人が動いているように見えました。

むかしの物は、かびんや、そのほかいろいろの物がありません。

むかしの物をよくさがし出したなと思いました。

ちようこくは、鳥のちようこくでした。ちや色ばい色をつかっていました。

えんぴつで書いてある絵がとてまじようずでした。

これからもすばらしい、りっぱな絵をたくさん集めて下さい。

さようなら

特別展「海と湖沼展」をかえりみて

特別展「自然との対話」  
「海と湖沼展」は、七月一日から三十一日までの一カ月間開催されました。

今回の特別展の展示を概観すると、日本画では、横山大観「朝陽映島」、小川芋銭「霞ヶ浦」、本県出身の吉田登毅「浄池」、川端龍子の七m以上におよぶ大作「海鷗」などから富取風堂「朝」や東山魁夷

《美の根》  
手づくりの工具

深沢 幸雄  
(版画家)

銅版画はヨーロッパから生れただけに、精緻、精妙なマチエールを創り出すその工具には合理的かつ精巧なものが揃っている。だがその形態、性能には当然の事ながら毛むくじやらの腕でナイフをあやつり、フォークで獣脂をつ、いていると云った感じがあって、我々日本人の掌にいくぶんかの違和感を残す。

の唐招提寺御影堂宸殿の間襖絵「濤声」(試作)、時田直善「早苗舟」小野具定「遠くなつた海」渡辺学「川口(遺された人)」吉岡堅一「濤」など十三点を展観しました。

洋画は、浅井忠の「漁婦」をはじめ、原田直次郎「海辺風景」、ポスター・図録の表紙等に使用した黒田清輝の「湖畔」などの明治三十年制作

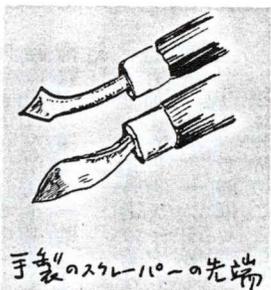
そこで僕は制作の寸暇をみつけてはその工具の日本スタイルへと改良を試みる訳だ。

細いヤスリ、折れたペインティング・ナイフ等、銅棒なら何でも良い、ナマシで叩いて加工しつ、銅版面に当る刃の角度、てのひらの中での親和感をしらべ、最後に仕上げの焼きを入れて磨きあげると賢治が云つた鋼青色の滑らかな光沢を放ち、小生自慢の工具が誕生する。今凝っているのはスクレーパー(削る工具)



特別展を観覧される東山魁夷(左)夫妻

の作品を筆頭に、藤島武二「屋島よりの遠望」、中村彝「海辺の村(白壁の家)」、安井曾太郎「鶴原風景」、曾宮一念「中禅寺湖」など三十一点



とパニツシャー(磨く工具)で、もし日本人の手にぴたりと納まる工具が生れたら個人はもとより、業者にも教えてひろめたいと考えている。銅版画も又何時になつても開拓期なのである。

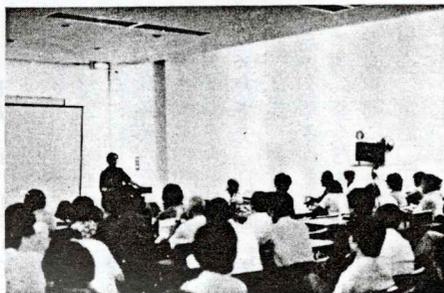
を展観しました。

第一・第二の両展示室に日本画、洋画の計四十四点をゆつたりと鑑賞してもらいたいと意図して展示企画をすすめ川端龍子の大作や屏風の展示などの苦心をしたことも思い出します。また、美術普及室を使い、特別展の参考資料室を特設し、写生地としての房総の歴史と現状について写真パネルや浅井忠・石井柏亭の画帳などを公開し、特別展の背景と作品への親しみをもつてもらおうように意図して展示しました。

安嶋文化庁長官特別展を視察(左端)



また、七月九日(土)の第二回美術を語る会において、話題提供者に洋画家遠藤健郎氏を招き「海と湖沼展をみて」と題し談話会を開きました。



講演会・渡辺学氏

七月十六日の講演会では、日本画家渡辺学氏により「なぜ漁民を描くか」と題して、映画とスライドをまじえて、渡辺氏自身の、画家として生きる氏の人格の赤裸々な心情を吐露していただきました。

また財団法人千葉県公立学校教職員互助会の御協力により特別展鑑賞券が発行され、教職員とその家族の方が、多数観覧される機会になった。

七月三十一日安嶋文化庁長官のご来館を得て展覧会は無事終了しましたが、本展を御覧になった約七千人の方々の心のどこかに作品の印象が残され、心の糧となることができれば幸いです。

# 展覧会案内

常設 房総の美術家

## 「新収蔵作品展」

8月5日～10月20日

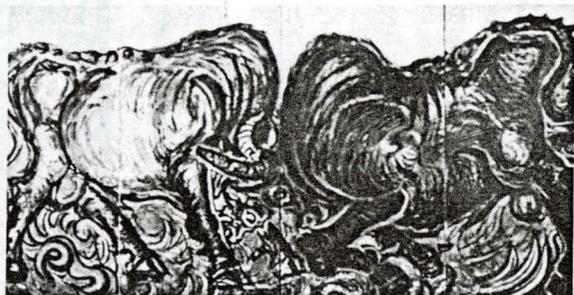
常設展は、年間を通じて三期にわけて開催しますが、その第一期「近代美術の十人」が六月二十六日で終了したのにもない、八月五日より十月二十日まで第二期の展示を行います。

第二期は、「新収蔵作品展」というテーマで、昭和五十一年度に収蔵された作品を中心に、今まで公開される機会が少なかった作品も加えて展覧いたします。

本館の作品収集の観点としては、  
(1)、地域美術館として、地域の総合性をそなえるため、千葉県にかかわりのある作家の作品の収集と研究を積極的にすすめる、関連資料も併せて収集する。  
(2)、近代美術館にふさわしい、日本内外の近代及び現代美術の作品を収集し、関連資料も併せて収集する。

という二本柱があります。この観点によって収集されたうち、今期に展示する作品としては、特別展としても取り上げ、しかも計画的収集を行なっている浅井忠・香取秀真の作品をはじめ、フォンタネーリの「神女之図」、鈴木鷲湖の「農耕の図」や駿嘯のレインボーシリーズ、池田満寿夫の版画など、三十六点です。

岩崎巴人「闘牛」



## 世界の

### 子どもの絵展

—日本と外国33カ国の心を結ぶ—

7月26日～8月28日

子どもの絵の展覧会は、本年で三回目を迎えました。が、昨年までは、日本の子どもの絵の優れた作品を展覧し、美術教育の振興の一助としてきました。

今回は、諸外国の子どもの絵も加えた世界の子どもの絵展を、七月二十六日から八月二十八日まで開催します。

「絵は世界のことば」ともいわれますが、絵をとおして日本の子どもと外国の子どもの心をつなげる楽しい展覧会です。生活環境や地域風土による表現の多様性を、発達段階に応じて展覧し、美術教育の振興に寄与したいと思えます。

日本の子どもの絵は、幼稚園・小・中学校各学年二〇点ずつ、計二〇〇点を学年別に展示します。

外国の子どもの絵は、イギリス、フランス、ベルギー、デンマーク、ノルウェー、など三十三カ国から一七〇点を国別に展示します。

## 房総の美術家シリーズ6

### 現代工芸六人展

9月10日～10月16日

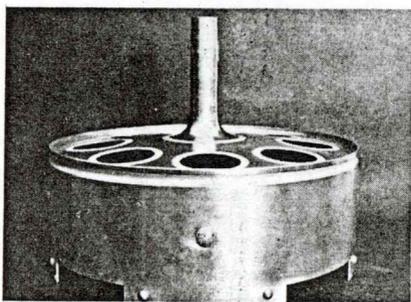
生活の中から生まれた工芸は、美術の一部門として発展し、明治以降は美術工芸としてその基盤を定着させてきました。

房総にゆかりの工芸作家としては、近代工芸の先覚者である香取秀真（鍍金、津田信夫（鍍金）等があります。

本県の工芸界には日展を發表の場としている優れた工芸家が多数活躍しています。

この展覧会では常に新鮮な感覚と豊かな技術に支えられ

信田 洋「九曜盤」



て制作している六人の現代工芸作家の作品をあつめ、土と炎、色と構成による美の世界における多様な工芸美を会場いっぱい展示しました。どうぞ御鑑賞ください。

#### ■出品作家

土肥刀泉（陶芸）、宮之原謙（陶芸）、山本正年（陶芸）、信田洋（彫金）、青木滋芳（染色）、二口志保子（染織）

#### ■出品点数

約三〇点

#### ■展示場所

第六室

## 第9回 県展

11月2日～11月13日

芸術の秋に開催の「県展」は今年で29回をむかえ、年々出品作品の質量ともに充実して、本県最大の公募展です。

今年も美術館を全館使用して11月2日から11月13日まで開催されます。日本画、洋画、彫塑、工芸、書道の各分野で作品が公募されますのでふるって御応募ください。

なお詳細については千葉県美術会（電話〇四七二～二二一～二七一〇）、または県立美術館学芸課まで。

新収蔵作品紹介

本月 6月

購入

浅井忠作「少女」「鎌倉」「鎌倉建長寺(1)」「鎌倉建長寺(2)」「多摩」「奈良」「平城大仏鐘楼」「風景」「金州城南門外」「兵士」「京都工芸学校の庭」  
香取秀真作「菊文釜及び風炉」「燼壺」「懸花生」「興亜軍公の歌」「片貝浜の歌」「短歌短冊」  
浜口陽三作「緑のぶどう」「トリコット」  
木村賢太郎作「立像」



浅井忠「兵士」



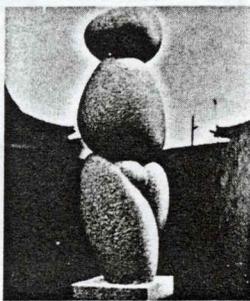
香取秀真「菊文釜」

月手波は日手越え  
他書大勝手むさし  
抱久片日れ冬歩

香取秀真「片貝浜の歌」

寄贈

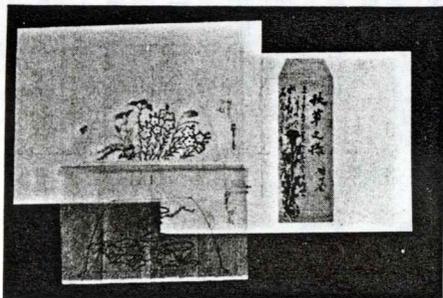
左記資料をご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。  
香取住江氏より  
香取秀真関係資料 拓本四十九枚、空海像資料、観音像



木村賢太郎「立像」

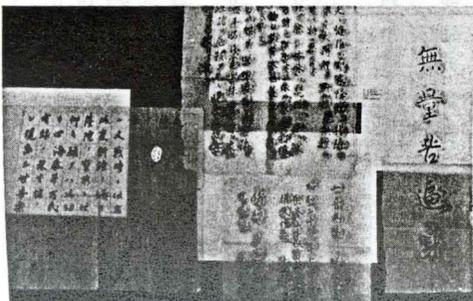


香取秀真「短歌短冊」



「秋草文様釜原図」

スケッチ、法隆寺六観音墨スケッチ、夢殿燈籠原図、机下絵、秋草文様釜原図、井上恒一氏蔵小鐘資料、龍文様スケッチ、五鈷鈴スケッチ、松本市正麟寺鐘資料、妙京大靈廟鐘資料、会津円蔵寺鐘資料、高岡市法界院鐘資料、総持寺鐘資料、四日市市顕正寺鐘資料、真光寺鐘資料、福島県示現寺鐘資料、長野県東昌寺鐘資料、牛伏寺鐘資料、愛知県蓮慶寺鐘資料、松岳寺鐘資料、釜原案下絵、短歌二首、写真三枚、鏡下絵、中央公論一冊、伊藤観魚作「絵はがき」二十六枚。



「牛伏寺鐘資料」



「観音像スケッチ」



寄贈された庭園樹木

庭園樹木寄贈される

開館4年目をむかえた美術館は昭和49年3月、第1期工事の展示棟が完成し、さらに51年2月には第2期工事の管理棟が出来るなど、施設の拡充に努めてきましたが、1万

トピックス

坪という広い敷地の環境整備については予算等の削減により思うように進まず、早期実現が望まれていました。

先ごろ東京電力株式会社より本館玄関附近に美術館としてふさわしい立派な庭園の寄贈がありました。

玄関の左手には県木であるマキの巨樹、そのまわりには多くの灌木が植え込まれて、写真のような変化のある美しい玄関となりました。

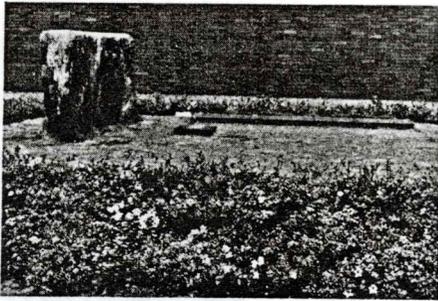
また美術館の南側にある筆塚のまわりには、島野みよ氏より植木が寄贈されました。

本館食堂のガラス越しに見える筆塚は書道芸術をたたえる記念碑として昭和49年11月に建設され、その周辺は平たんな芝生だけでしたが、この寄贈により筆塚にふさわしい環境が出来ました。

さらに管理棟の前庭には鈴木勝氏よりヤマボウシ一株の寄贈がありました。すでに白

い花を咲かせ訪れる人の目を楽しませてくれました。寄贈者各位に厚く御礼申し上げます。

筆塚周辺の寄贈された植木



寄贈されたヤマボウシ



団体展(9月~11月)

- ▼第6回写真千葉県展 9・13~9・25 無料
- ▼千葉新象展 9・20~9・25 無料
- ▼文化書道千葉県連合会第4回書道展 9・20~9・25 無料
- ▼第1回モダンアート18人千葉展 9・20~10・2 無料
- ▼第24回千葉県勤労者美術展 9・27~10・2 無料
- ▼第9回ファンシー洋画展 9・27~10・2 無料
- ▼千葉市水墨画同好会連合会展 9・27~10・2 無料
- ▼千葉77展 10・4~10・13 有料
- ▼第7回新構造千葉県支部美術展 10・4~10・10 無料
- ▼千葉市小中学校児童生徒作品総合展覧会 10・15~10・20 無料
- ▼第9回千葉県高等学校芸術祭美術・工芸・書道展 11・19~11・27 無料
- ▼昭和52年度千葉県芸術祭写真展 11・19~11・27 無料

日誌抄(5月~7月)

- 5月 「美術を語る会」開催
- 14 千葉県博物館協会総会
- 19 美術館協議会開催
- 20 第1回実技講座「千葉港を描く会」開催
- 22 山梨県美術館準備室より来館
- 26 東京電力株式会社より庭園樹木寄贈される
- 6月 千葉テレビ、特別展「海と湖沼展」取材に来館
- 10 神奈川県立博物館より美術普及室を視察に来館
- 7月 特別展「海と湖沼展」始まる(7月31日まで)
- 1 沼田副知事来館
- 2 鴨川、江澤館より江澤栄氏特別展観覧のため来館
- 5 「美術を語る会」開催、話題提供者 遠藤健郎氏講演会「なぜ漁民を描くか」渡辺学氏。80名聴講
- 9 30日まで博物館実習を行なう。実習生5名
- 16 埼玉県立博物館より来館
- 18 美術資料評価委員会開催
- 20 第2回実技講座開催(24日まで)
- 21 東山魁夷御夫妻来館
- 23 安嶋文化庁長官特別展視察に来館
- 31
- 27